

エコラリアからの展望

—有効な発達支援のために—

| | | |
|-------|---------|-----------|
| 企画 | 言語発達分科会 | |
| 司会 | 高橋 登 | (大阪教育大学) |
| 話題提供者 | 小山 正 | (神戸学院大学) |
| | 田中みどり | (女子栄養大学) |
| | 廣澤満之 | (目白大学) |
| 指定討論者 | 秦野悦子 | (白百合女子大学) |
| | 大伴 潔 | (東京学芸大学) |

[企画主旨]

「エコラリアの意味を問い直す」昨年度の自主シンポジウムを発展させ、この 30 年余りのエコラリア研究を生かして自閉症スペクトラム/自閉性障害児のエコラリアをその肯定的な側面も含めて発達の通過点として特徴づけ、関連する認知発達や対人関係やコミュニケーション機能等の変容過程を見据え、保護者も含めた包括的な視点でエコラリアからの手堅く有効な発達支援について考えるシンポジウムとしたい。

まず「エコラリアから他者のことばの自己化へ」という観点から、主としてエコラリアの変容に関わる象徴機能の発達について詳細な話題提供をお願いします。次にエコラリアの段階から約 1 年半の間に比較的自然な会話が可能になった自閉症スペクトラム障害児の事例について、情動調律や対人的な関わりの多様化、発話機能の豊富化と他者のことばの反復に焦点を当て報告する。さらにエコラリアの機能分類に基づく発達変容過程の知見や保護者のエコラリア理解の分析に基づく子どもと保護者支援を検討する話題提供をお願いします。

最後に二人の指定討論者からの討論を通して、子どもの特性に応じ、保護者も含めた総合的な発達支援の可能性について探る。

「エコラリアから他者のことばの自己化へ—その発達過程」

小山 正 (神戸学院大学)

前回、私たちが発達支援を行ってきた事例のなかでエコラリアがみられた自閉症スペクトラムの事例を通して、エコラリアの発達について、特に対物行動における物への志向性や他者のことばの自己化という観点から報告した。エコラリアの変容には、他者との関係性の過程での他者認識の発達と物への志向性や対物活動との関連性が関わっていることが明らかであることも指摘した。

他者のことばの自己化がみられ始める時期には、対物行動に広がりが見られてくるが、物への興味の偏りがまだ強くあるので、日常生活経験のなかで他者認識の発達を考えながら、対物認識を深め、他者とことばを交わすことが重要である。その過程で、子どもの他者のことばの自己化が深まり、自発語の増加がみられてくる。特にこの時期には、象徴化・表象の発達を考えていくことが重要で、子どもの興味のある事物等の象徴化を象徴遊びの場面において進めていく。エコラリアではなく、他者のことばの自己化がみられる時期には、療育者との遊びの過程で玩具のミニフードを自分の口に実際に入れるようなことはあるが(本当とふりの理解の問題)、人形にままごとのミニフードを食べさせるなどの脱中心化や他者理解につながる行為や、知っている事物の絵カードに対してじっと注視し命名することがみられてくる。また、象徴遊びにおいては、行為の連鎖(系列化)も現れ、発語では、これまでエコラリアのなかでみられていたことばに他者との関係のなかで交わされた語と結びつき、語連鎖が出現してくる。この時期には、日常生活において、言い回しや複雑なことばをしばしば場面に適切な状況で産出するようなことがみられ始める。

本シンポジウムでは、エコラリアがみられていた事例の他者のことばの自己化から子どもの主体的・生産的な発話に向けて、象徴機能の発達という観点からの発達支援について話題提供する予定である。

「関わりの多様化と発話機能の豊富化」

田中みどり（女子栄養大学）

小学校2年生で特別支援学級に在籍するASD児への約1年半の発達支援の経過の中で(小池・田中、2011)、支援者を避けて走って行ってしまふ段階から、目が合うと笑う・頭を撫でられると喜ぶなどの非言語コミュニケーションがとれるようになり、「あっ、あっ」と伝えたいものを指さしたり支援者のことばをオウム返しする段階を経て、単語で支援者に話しかけるようになり、他児とも少し遊べるようになった段階で1回約20分間支援者と1対1での遊びセッションを約2か月にわたりほぼ週1回計7回実施した。この間に見られた社会的行動と会話の発達を中心に報告する。セッションは小学校の空き教室で子どもの好きなドミノ倒しに使われていたブロックを使って行われた。

初回のセッションではもっぱら子どもがブロックをボーリングのピンのように並べ、広い机をボールを転がして倒しては並べ倒すことを繰り返す「ボーリング・スクリプト」に基づくような遊びで、支援者はドミノのブロックを机上に準備したりして子どもが遊べるように世話をし、すべて倒れれば二人で喜んでハイタッチした。2回目からは二人で大きな楕円を作ってドミノ倒しをする協調行動が見られ、子どもが支援者の注意を惹きたい時は高い声で「あれ：：」と言って支援者を見て注目してくれるのを確認する行動が増加した。3回目になると子どもが能動的に遊びをリードし、支援者のドミノ並べを手伝ったり、互に笑って顔を見合わせるなどの相互的行動が増えた。後半のセッションでは情動調律がピークに達して間主観的に楽しさを共有する時には二人のことばも声の高さも同じになる一方、子どもが仕掛けて予想通り支援者が困惑するのを喜ぶ「からかい行動」も始まった。さらに回を重ねると、段ボール箱を使って箱の上から玉入れのようにドミノのブロックを入れる遊びなどを新たに考案して遊びが多様化し、支援者をからかって支援者がほとんど困った様子だと「一緒にやろっか？」と関係を修復しようとする敏感さもみられた。

7回のセッションを通じて時間当たりの子どもの発話数は増加して言語的やり取りが活発化し、発話機能も依頼・提案・教示・禁止等々と豊富化したが、通常なら「うん」等と相手の質問に肯定的に応えたり「そうだね」と相手に同意したりする時に相手のことばを反復することが特徴的であった。

「エコラリアの発達変容過程と保護者の理解」

廣澤満之（目白大学）

自閉性障害児のエコラリアは、かつて消失させるべき発話として理解されていたが、近年、コミュニケーション手段としての有用性が認識されるようになってきた(Prizant et al., 2003)。一方で、エコラリアを直接的な対象とした研究は依然少なく、発達段階として位置づけるといった課題や周囲の支援者がエコラリアをどのように理解するかといった課題は、未検討の部分が多い。本発表では、第一に、エコラリアの発達変容過程を提示して、それと併せて、子どもにとっての主要な支援者である保護者のエコラリアに対する理解の内容を検討する。これらによって、発達支援を行う際にエコラリアをどのように扱うのかといった課題について議論する。

エコラリアの発達変容過程については、Prizant & Duchan(1981)らの知見に基づき、機能に分類して、面接調査を行った。その結果、①発達の初期段階には、共通した機能のエコラリアが生起すること、②発達に伴って消失する機能と継続する機能があること、③知的機能と生起するエコラリアとの関連があること、といった3点が明らかとなった。このことから、発達段階や知的機能といった要素を加味しながら、機能特性に基づく発達支援のあり方について検討した。

エコラリアに対する保護者の理解については、エコラリアを機能に分類した上記の視点にしたがい、機能ごとに保護者がどのような理解をしているのかについて面接調査を行った。その結果、保護者のスクリプトからは、①コミュニケーション手段としての有用性、②子どもの特性を理解する手がかりとしての意味づけ、③発達の側面からの理解、④エコラリアへの対応方法、⑤診断との関連からの意味づけの5点が見出された。これらの結果に基づき、エコラリアの機能特性に基づいた保護者支援のあり方について検討を行った。